
君が造られた理由

こぬか雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が造られた理由

【Nコード】

N9317F

【作者名】

こぬか雨

【あらすじ】

父が造った人型の特攻兵器『秀』。何故どうせ死んでしまう存在に、父はこんな美しい容姿を与えたのか。その理由を、僕はつらつらと考える――

（前書き）

『SFでBL』というコンセプトで、三時間くらいで書き上げた文です。初SFなんで、相当至らない点が多いかと思えます。ではでは、お楽しみください！

特攻用の兵器として生まれた彼の目に、世界はどう映っているのだろうか。

施設の窓からぼんやりと外を見つめる、彼の透明過ぎる黒の瞳を見ながら僕は考えた。

どうして父はこんなものを作ったのだろう。どうせ突っ込んで死ぬだけなのだ。容姿なんて適当でよかったはずなのに、どうしてもこんな綺麗な少年の姿を模して造ったのだろう。

その理由は完全に謎というわけではない。父はゲイで、母とは力モフラージュのために結婚したと聞いている。だから僕は性行為の結果の子ではなく、人口授精の結果の子なのだと。それでも幼なじみだという両親は友達のように仲がよかったし、僕はそのことについてには納得している。だが納得出来ないのは――何故どうせ死ぬ存在に、初恋の少年の容姿を投影したのかだ。

父はこの兵器が使われないことを予期していたのか。それともたとえ死ぬとわかっていても造らずにはいられなかったのか。父も母も死んでしまった今となつては、それは永遠の謎だ。

「――^{ひで}秀」

僕は外を見続けている彼に呼び掛けた。その名前は父の初恋の少年で、名前や儚げな容姿とは裏腹に活発な人だったらしい。

「何ですか、マスター？」

「外には何が見える？」

「森が見えます」

そうだろうな、と僕は笑った。この施設は鬱蒼とした森の中に作られた、見えない場所なのだから。

「それから、鳥も見えます。啄木^{キツキ}鳥が」

「本当だな」

僕は秀と同じように外を眺めた。そして昨日『外』で会った政府の役人のことを、ぼんやり思い出し出していた。

「引き渡してほしいんですよ」

飽くまで丁寧に、役人は僕に言った。次の戦争のために、一台で一つの部隊を壊滅させる力を持つ秀を引き渡してほしいと。しかし僕は首を縦に振りはいらない。秀は父の唯一の形見だ。渡せるわけがない。

「お金ならいくらでも出しますから……」

「お前は父親の形見を売れというのか？ それは無理だ」

「従わないようなら、国家反逆罪で貴方を捕らえます」

「三年前に、秀のデータを送ることで話はつけたはずだが？」

役人はまた戦争が始まるかもしれないのだ、と言った。しかしそれは嘘だということを僕は知っている。彼らは秀を処分したいのだ。「平和な国」を世界にアピールするために。僕は溜息をつく。秀は力を薬で抑えられている。もう兵器としては完全に役立たずだ。もちろん、薬を抜けば元に戻るだろうが。

「——少し考えさせてくれないか？ 一週間以内にそっちに回答の電話を入れさせてもらう」

わかりました、と言って役人は去って行った。今日の役人は物分りがいい。これ以上話しても無駄だときちんと理解している。しかし気分は悪かった。

（秀は渡さない……）

それはどこか独占欲にも似ている。秀と暮らしているうちに僕は自分には抜き難く父と同じ部分があるのだということを悟り始めていた。

恋愛感情とは少し違う。もっと静かに、それでいてどろどろした感情だ。この生活を守るためなら何にだって耐えてみせる。そう思

うほどに熱い何かが僕にはあった。多分それは母親似の僕が唯一父から受け継いだものなのだろう。

「マスター？」

物思いに沈んでいると、秀の声がした。僕は慌てて顔を上げる。

「どうしましたか？」

「いや、ちよつと考え事だ」

「そうですか。何だか具合が悪そうだったので……」

マスターに忠実な兵器。これがもし戦地に赴いたら恐ろしいことになるだろう。だから政府に引き渡して、壊したほうがいいのかもしれない。だけどそれは嫌だ。たとえ世界中の人間が死に絶えても、秀だけは傍に置きたい。

「マスター、本当に大丈夫ですか？」

秀は右手に嵌めていた革の手袋を外し、僕の額に手を当てた。掌にある紅い鉱物が彼の力の要である。今は専ら、日常を少し便利にするためにしか使われていないが、額に鉱物が当たり、ひんやりと気持ち良かった。

「三十六度六分……熱はありませんね」

そう言つて、秀は再び手袋を嵌めた。両手とうなじのところにあるこの鉱物は、実は非常に弱い。薬で力を抑えている今は、人の唾液に含まれる消化酵素ですら、鉱物に致命傷を与えてしまう。だから僕は、なるべくそれを出さないようにと言っていた。秀はもちろん律義にそれを守っている。

「気分がすぐれないようなら、お休みになつては？ 今日は何もないのしょう？」

「……そうだな」

ここで休まないと、秀は鬱陶しいまでに心配してくるだろう。介護ロボットじゃないんだから。そう思いながら僕は笑う。

「じゃあ仮眠を取らせてもらつよ」

僕はそう言つて、部屋の隅にあるベッドに横になった。秀が僕に甲斐甲斐しく布団を掛ける。まるで新婚だ。父はこれをやりたくて秀を造つたのではないか、そんな下世話な推測さえ浮かんでしまう。「後で、マスターの好きなはちみつレモンを出しますね」

「ありがとうございます……」

全く兵器とは思えない。これが薬を抜いただけで、戦闘機に特攻し続けても十機までは無傷でいられるような力を持つものになるのだ。父の技術は本当に信じられない。

気がつくと、三時間が経過していた。どうやら完全に寝てしまつたようだ。部屋を見回すと、相変わらず秋もせず外を眺めている秀がいた。しかしいつもと様子が違う。その膝の上には写生会で子供が使うような紐付きの板と、おそらくコピー用紙なのだろう、白い紙があつた。

「何をしてるんだ？」

「さっきテレビで、風景画の講座をやっていたんです」

「ああ、教育テレビか。しかもそれは多分再放送だな」

時間帶的にそうだろう。僕は立ち上がつて、秀の絵を何気なく見る。そして愕然とした。

上手いか下手かといえば、多分上手い。そのあたりは機械だから、写實的に描くのは簡単なのだろう。しかし僕は初めて、秀がどういう世界を見ているのかを知つた。

——これじゃあまるで、室の悪いCGだ。

木は円錐と円柱の組み合わせ、鳥は人間の作つたぎこちない口ポットバードのようだ。これなら二本の線に綿のようなものを描いて木と主張してくれた方がまだいい。

「僕の絵、どうですか？」

「画家にはなれないな。僕が美術の教師なら、評定は三だ」

「つまり、普通ということですか」

「そういうことだ。それより、はちみつレモンが飲みたいんだけど」
すぐ用意します、と言って、秀は水を入れたマグカップとはちみつとレモン汁を持ってきた。そして手袋を外し、マグカップに手を当てるだけで、中の水は沸騰を始めた。それにはちみつとレモン汁を入れて掻き混ぜる。簡単な飲み物だが、僕はこれが好きだ。

「どうぞ、マスター」

「ありがとう。秀も飲めば？ このくらいならきちんと排泄されるから大丈夫だよ」

「では、そうします」

秀はそう言つて、もう一つマグカップを持って来た。同じ手順ではちみつレモンを作り、手袋を嵌めてからそれを飲み始める。

「はちみつとレモンの味がしますね」

「そりゃあ、それしか入ってないからな」

こういうところは機械だ。僕にとっては何よりも美味なものだが、秀にしてみればはちみつとレモンでしかない。感情の共有が出来る方法はないのか。今度の研究はそれにしようかな、と僕は考えた。だから政府には、もちろん断りの電話を入れるつもりだ。貴重な実験台がいなくなってしまうから。

「そつえば先程テレビで、肉じゃがの作り方をやりました。食べたいですか？」

「うん。でもジャガ芋残ってたか？」

「確認していませんでした……」

「肉じゃがにジャガ芋がないって、『肉』になっちゃうだろ」

秀は静かに笑った。すぐに台所を覗いてジャガ芋があるかを確認する。

「一個は少ないですよね？」

「それは『肉……じゃが？』になるだろうな。僕はジャガ芋が多い方が好きだ」

「じゃあ、すぐに取り寄せますね」

秀は手袋をしたままパソコンを操作し、生協にジャガ芋を注文した。三十分もすれば、ジャガ芋を持った配達ロボットが来るだろう。その前に準備をしよう、と言って台所に迎った秀を僕は追い掛ける。

「暇だし、手伝うよ」

「ですが……」

「玉葱切るの嫌いだろ？ やってやるよ」

ありがとうございます、と言いながら、秀は包丁とまな板と食材を出し始めた。玉葱、系こんにやく、牛肉、そして調味料。テレビのレシピにあった、こだわりの味付けに挑戦するらしい。俺はそれを笑いながら見て、そのあと玉葱を切り始めた。一人分だから、それほど量はいらない。しかしやはり涙が出てしまう。

「涙が出ない玉葱を開発してほしいよな」

「もう出回ってますよ。『No More Cry』って、すごく高いものが」

「誰だよ、その名前付けたの……おもしろいな。今度買ってみようよ、それ。ちよっと味が気になる」

「わかりました」

しかし、『Cry』かよ。泣き叫んでいるわけではないのだが。

僕は苦笑しながら玉葱を切った。

その時、誰かがインターホンを鳴らした。

「ジャガ芋が来たみたいですね。取ってきます」

「あ、僕が行くよ」

「いいです。泣き顔で出て行ったら誤解されますよ」

相手はロボットだから、誤解されても構わないのだが。しかし秀は僕の反論も聞かずに、玄関に向かった。僕は仕方なく玉葱を切る作業に戻る。

しかしその手は、玄関から聞こえて来た秀の声によって硬直させられた。

「何てことを……！」

それは怒りに満ちた声。僕は急いで玄関に向かった。

玄関には黒服の男達と、意味不明な譫言を呟いている配達ロボット、そして見たこともないくらいに激昂している秀がいた。科学者としての頭は、瞬時に状況を整理する。

黒服は政府の人間。そして彼らはこの場所を知らない。配達ロボットは知っている。しかしロボットには守秘義務がある。政府の人間が無理矢理この場所を聞き出して、そのせいで壊れたのだろう。そして秀はそれに怒っている。

「……何てことを……許せません！」

機械である秀にとつて、ロボットは人間よりも近い存在——いわば友人だ。それを傷つけられて怒らないはずはない。秀は手袋を脱ぐ。今の秀ではたいした攻撃は出来ない。しかし生身の人間は簡単に殺せるレベルだ。

「——やめる！」

咄嗟に放ったのは、絶対遵守の命令。秀の動きはそれだけで簡単に止められてしまう。僕はそのまま秀を下がらせ、男達の前に立つ。

「何の用だ？」

「貴方は全てを知っていたようですね、水上博士^{みななかみ}。あのあと、情報が漏れているのが明らかになったんですよ。それを貴方が閲覧していたことも」

「だから強奪しに来たわけか。秀を公開処刑するために」

そうですね、と役人の男は柔和に笑う。その笑顔が鼻についた。

「そんな対外的なパフォーマンスのために、秀を渡すことは出来ない。薬さえ飲めば、たいした力を出せない」

「それでも、十分人は殺せるでしょう？」

「だが僕がいる限り、そんなことはさせない」

マスター、と秀の掠れた声が聞こえる。だから安心させようと振り返った僕は、そのまま凍りついた。

秀の後ろにも、たくさんの黒服がいたのだ。

しかもおそらく元軍人——気配は完全に消えていた。

そして彼らは乱暴に秀の体を拘束する。薬を飲んだ上に、兵器としての訓練を積ませていない秀にはなす術がなかった。

「秀……っ！」

僕の体も拘束される。それを見た秀が、右手を動かした。

「マスター！」

しかし黒服は冷静に秀のタートルネックをずり下げ、音を立てながら真紅の鉋物に舌を這わせた。

「……っ……あっ……マス、ター……！」

「秀！ くそっ！」

その鉋物は、手の平にあるそれよりも脆い。僕は秀に手を伸ばすが、それは届かなかった。

「離せ！」

僕の抵抗を嘲笑うように、黒服は秀のうなじを舌でなぞり続ける。鉋物の部分は敵のバイタルをチェック出来る部分でもあるため、敏感に出来ている。だから秀からは、聞いたこともない、甘さと苦痛が入り交じった嬌声が漏れていた。

「……あ……やだ……っ！」

「やめろ！ やめてくれ！」

兵器の力はどうでもいい。だがうなじの鉋物は、秀の命そのものだ。早くやめさせなければ、秀が死んでしまう。それは駄目だ。

「別に私達は、ここで彼を殺してしまっても構わないですよ。一日だけなら、死んでも動かせますからね」

「お、前ら……っ！」

時折反り返る体は、おそらく父が相当美化しているのだろうが酷

く女性的で柔らかい。しかしそれは快樂によるものではないと、その苦痛に歪んだ顔が示している。

「……マス、ター……僕のことは、もう……だから……っ！」

「お前を手放せるかよ！ 僕にはお前が必要なんだ！」

僕が叫ぶと、僕を拘束している役人が笑った。

「父上と同じで、貴方もそういう人間だとはね。——汚らわしい」

「ふざけるな！ 父を侮辱する権利はお前らなんかにはない！」

苦痛に満ちた秀の嬌声と、僕の怒号が重なり合う。悲しい和音だと思った。

「彼のモデルになった秀という男とは、貴方が生まれてからも会っていたそうです。そして体を重ねていた。しかし秀は病死し、悲しみに暮れた貴方の父上は、彼を造った。自分の手で戦地に送り込むことで、過去を精算するつもりだったそうです。しかしいざとなると手放せなくなった……どうしようかと悩んでいたものの、そのまま運よく戦争は我が国の勝利に終わり、その一年後に貴方の父上は穏やかに死んだんです」

「だから何だよ！ さっさと秀を離せ！」

「悍ましいし、汚らわしい。彼は確かに美しいが、兵器でしかも雄性体だ」

まるで精神に染み込ませるように言われる。そういえば、政府の役人の中には言葉だけで人を殺せるように訓練を受けた人間がいると聞いたことがある。しかしそれがわかったところで——抗えない。

「……僕、は……っ！」

頭が真っ白になっていく。

何も考えられないままに、心が塗り潰されてしまう。

「マスター……っ！ くっ……！」

秀の声だけが、やけに鮮明に聞こえる。慣れ親しんだ声だから当たり前なのだろうけれど。

だけどその声は何よりも美しい、音楽のように僕には聞こえた。

——もう、何もかもどうでもいい。

秀の傍で、僕も父のように逝きたい。それ以外、何もいらない。

「……汚れていようが狂っていようが……秀さえいれば僕は満たされる……それでいいんだよ……！」

「マスター……」

「——緊急制御解除」

僕の言葉に、黒服達は目を見開いた。

——それは一時的に、そして強制的に、秀を兵器として動かす言葉だ。

「何を……自滅するつもりか!？」

動揺して拘束が弱まった隙に、僕は自由になった。そして同じように自由になった秀を引き寄せる。

「十秒やる。その間に——」

僕が言い終わる前に、黒服が一斉に射撃して来た。だがその銃弾は一つも僕には届かない。秀が全ての銃弾を両手で受け止めているのだ。

「マスターの命を最優先に。他はどうなっても知りません」

その言葉に、黒服は動揺したようだった。僕は秀の頭を撫でながら笑う。

「兵器としての能力を全て解放し、心というリミッターを外した後、秀はマスターである僕だけは殺さないし、僕の命令は聞く。そ

れがどういうことかは、わかってるよな？」

「くっ……仕方ない。今日のところは引こう」

黒服のリーダーであろう青年が言う。僕は彼に向かって笑みを浮かべた。

「物分かりが良くて助かるよ」

「勘違いをするな、水上博士。今日はそれに対抗する手段がないから引くが、貴様は国家の敵になった。すぐに追っ手が来る」

「だろうな。だが……捕まらないよ」

「それは無理だ」

青年がそう吐き捨てるのを契機に、黒服は一斉に帰って行った。

僕はそれを見送ってから秀のリミッターを元の状態に戻す。

「マスター……大丈夫、なんですか……？」

「とりあえず肉じゃがは食べられそうにないな。それに、ここを出ないと」

居心地がよかったのだけど。溜息をつく僕を、秀が心配そうに覗き込む。

「マスター……」

「それより、お前こそ大丈夫か？」

相当力は削がれたはずだ。忌ま忌ましい黒服め。そう呟きながら秀のうなじの鉋物を見る。

「……これはひどいな。仕方ない」

僕は白衣から、小さな瓶を取り出す。その中の紫色の液体を見て、秀はわずかに身を引いた。それは鉋物の力を回復させる薬なのだが、実は恐ろしくまずいのだ。

「それはなくても、多分大丈夫ですっ！」

「これから逃げるのに、倒れられちゃ困るんだ。堪忍しろ」

僕は瓶の中身を口に含み、逃げ腰の秀の顔を引き寄せた。

「マスター……んっ」

口移しで薬を送る。最初はあまりにもまずい薬と、動き回る僕の舌に戸惑っていたが、しばらくすると抵抗する力が弱くなる。

「んっ……ふっ……マス、ター……」

秀の甘い声を聞きながら、幸せだと思った。やはり僕は父の子供らしい。

「僕が死ぬまで、傍にいろよ。父さんのときのように……」

汚らわしいとか、悍ましいとか、もうそんな概念は必要ない。父の気持ち、少しだけわかった気がした。

「愛してるよ、秀」

父も多分、だから秀を造ったのだと、僕は思った。

（後書き）

後書き SFは書けなかった……。 前書きにもあるように、『SFでBL』というコンセプトで一気に書き上げたらこんなことに（ハハハ； 個人的に秀はお気に入りです。基本、受の子が好きなのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9317f/>

君が造られた理由

2010年10月8日15時11分発行